

わが国における父親の子育てに関する 歴史的変遷についての一考察

— 明治・大正期に焦点をあてて —

A Study on the Historical Transition of Father's Child-rearing in Japan
— Focusing on the Meiji and Taisho eras —

岡村 泰敬* 南野 奈津子*
OKAMURA Yasuhiro, MINAMINO Natsuko

要旨

近年、父親の子育てが促進され、父親の子育てに関する研究も行われつつある。家族史研究をみれば、子育ての担い手として女性や母親のみを対象としている研究が多く、明治時代以降も、父親の子育てに着目した研究は少ない。一方で、子育てはその時代の社会状況とも深く関わる。父親の子育てと社会の風潮や出来事との関連を検討することは、現代、そして今後の父親の子育てに関するありようを模索していくうえでも参考になるだろう。そこで本稿では、わが国における明治・大正期の子育てに関する文献レビューから、子育てに関する変遷や子育て状況を把握し、当時の父親の子育て状況を考察する。

NII学術情報ナビゲータ (CiNii) において、抽出された428文献のうち、本研究の目的に合致した文献は13件であった。それらの文献は、①明治・大正期の子育ての変遷、②父親の子育て状況の2点に分類された。明治期以降、制度及び教育上、子育ては女性の役割へと変遷をとげ、父親は子育ての役割から排除され、1912年以降は雑誌から父親の子育てに関する論稿は消えていったことが示された。一方で社会的にも著名な人物により父親の子育て役割の必要性が説かれ、大正期には父親も子育てに協力していた実情についての記述も示された。

結果からは、社会的に著名な人物が、父親が子育てを担うことの必要性を社会に発信しており、その存在が、父親が子育ての一部を担うことに寄与したとも考えられた。その声が少数であっても「子育てを男女協力して行う意義」が社会に発信されることは、父親の子育ての促進に影響を与えうる、といえる。

キーワード：父親 子育て 歴史的変遷

*東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科 Toyo Univ. Faculty of Human Life Design
連絡先：〒115-8650 東京都北区赤羽台1-7-11

1. 研究の背景及び目的

近年、わが国では父親の子育てが求められるようになり、男性の育児休業の取得率の向上等、父親が子育てを担う状況が促進されている。2010年に政府による「イクメンプロジェクト」が開始され、2010年における男性の育児休業取得率は1.38%であったが、2020年には12.65%となり、「イクメンプロジェクト」後10年で約10%上昇している。男性の育児休業の取得率は、取得日数などについては個人差があることも考えられ、女性の育児休業と比較することは難しいが、男性が子育てに関わろうとする意識が高まっており、その背景には父親の子育てを奨励する社会の機運の高まりが影響を与えたと考えられる。

父親の子育ては、時代の中で社会情勢や社会風潮の影響を受ける。ゆえに過去の歴史をひもとき、その中にみられる社会の動きと子育てとの関連を考察することは今に至るまでの父親の子育て、そして今後父親の子育てをサポートする社会づくり、という観点からも重要である。

そこで本稿では、わが国における明治・大正期の子育てに関する文献レビューから、子育てに関する変遷や子育て状況を把握し、当時の父親の子育て状況を考察する。

2. 先行研究の整理

(1) 明治期 (1868-1912) の子育て状況

日本は明治時代より性別役割分業のもと、男性は働き手となり、女性は家事・育児という役割を家族の中で担うようになってきた。石井 (2013) は明治時代の特徴について、性別役割分業の固定化、封建的な女性像の賛美、女性の母親役割の強調をあげている。また、家庭や家族といった言説からは男性は排除されていき、家長としての役割が強調されたとしている。

明治初期からは啓蒙思想により、一夫一婦論や廢娼論が唱えられ、女子の地位向上等が論議された。また、自由民権運動や社会改良論の影響もあり、男女同権論や婦人参政権論、女子教育論が盛んになり、1878年頃には岸田俊子らの女性活動家も登場した。

1882年になると「家庭教育」が学校教育の下請けと位置づけられ、「家庭教育」という概念が普及し、この「家庭教育」の担い手が母親とされた。沢山 (1990) は、このことで、父親が行ってきた子育て行為が、子育て及び教育とみなされなくなっていき、父親が子育ての表舞台から消えていくことになった理由の一つであるとしている。また、この当時、心理学・生理学・医学の分野においても父親排除の動きがおこる。父親は、生理的に母親にはかなわないという言説が、育児書をはじめ高等女学校の教科書や育児相談などにまで満ち溢れていく (沢山、2013)。1899年には、高等女学校令で、「良妻賢母論」の徹底がみられ、女子教育の支柱となり、学校教育やマスメディアを通じて、協力を構築されていった (牟田、1996、木村、2019)。

明治20年代後半になるとわが国では、「主婦」の語が現れ、主婦の仕事が具体的に書かれた記事の連載などが始まった。掃除や料理といったことは、家長の妻の仕事ではなかった。しかし、下碑の減少などにより、家長の妻が掃除や料理を行うことは社会で喜ばれる変化とされた。これらの背景から、牟田 (1996) は、このころに家事が主婦という名の女性に当然の任務になり、主婦が存在し始めた

している。

1886年頃から、わが国は「良妻賢母論」へと傾いていった。そして、1894年（明治27年）の日清戦争の前後には、良妻賢母の育成が盛んに唱えられるようになり、女子教育へと繋がっていく。このことは、女性が家事労働を通して、国家に貢献する具体的国民としてとらえられたことを意味している。女子教育がうたわれた理由について小山（1981）は、日清戦争を契機に、女性は夫や子に対する私的感情より、国民としての感情を優先させる必要が生じ、家庭内存在のみであった女性に対して、国民意識を喚起することが急務とされたためとしている。この明治20年代後半について牟田（1996）は、女性が西洋風に流れたことを反省し、家長や夫に従順な良妻賢母のような女性が「日本古来の伝統」と理想化され、日清戦争及び日露戦争において、女性は重要な論拠の一つになったとしている。また、村上（2019）も「家庭」は、二つの戦争を経て、明治生まれの若い世代が国家を明確に形作るための記憶の器として用意されたとし、女性の存在感を重視して語られていたことを明らかにしている。

明治30年代（1898年頃）になると、小学校の女子就学率が上昇していく。1899年（明治31年）には、高等女学校令で、「良妻賢母論」の徹底がみられ、女子教育の支柱となり、学校教育やマスメディアを通じて、協力に構築されていったとされている（牟田1996、木村 2019）。そして1900年（明治32年）に高等女学校令が公布され、良妻賢母主義は、女子教育の国家公認の理念思想となった。蔵澄（2008）によると、当時の「修身」という科目について、女子教育の場合、「修身」は「良妻賢母主義」を基盤とし、それを最大の目標とした。良妻賢母観とは、男女の別を問わず、女性を抽象的人間や抽象的国民ととらえ、他方で男女の別を重んじて、女性の本来の役割を「内」という家事労働全般に求める女性観である（小山、1981）。当時の教科書では、賢母ではなく、夫に対する妻としての態度と女徳が強調されていた。小山（1981）は、修身の教科書について、明治44年から大正9年までは、家事労働の重要性が強調され、女の本来の役割は家事労働にあることが説かれたとしている。

（2）大正期（1912－1926）の子育て状況

沢山（1990）は1910～1920年代のキーワードとして、「母性」と「母性愛」をあげている。1900年代はじめに「母性」という翻訳語が登場し、「愛」と統合するかたちで広く社会に流布された。その大きな要因として、母親の権威を高めるといった点から母親たちの支持を受けたことや、母親の我が子意識の高まりに適合したこともあったとされている。そして、男＝父親・女＝母親の役割が、「父性」「母性」で区別され、子を産むことや子育てにおける男と女の関係が、「母性」「父性」で語られるようになっていく（沢山、2013）。そのほか、明治の後半から大正にかけての都市化により、都市中産階級では近代的家族を現実化する基盤を得て、女性の母としての責務は「母性」及び女性の本能であるとの認識が強化されていく（牟田、1996）。

そしてこの時代、各育児雑誌等では、1912年を最後に父親による育児日記が姿を消していく。この変化について、父親が育児方針の提供者から協力者に変わり、従来の父親の育児行為や子どもとのかわりが、子育てや教育行為としてみなされなくなったのではないかとされている（沢山、1990）。性別役割分担の夫婦において、女性が母親としてもっぱら子育てを担うという状況は、男性にとっては父親として子どもへの愛情を発露できない状況となっている（沢山、2013）。

明治・大正期は父親が子育てから排除されていき、子育ては母親の役割とされ、母親には母性があ

るとされてきたが、そのことに対して、異を唱えたものもいる。野村芳兵衛（1973、以下野村）は、男にも女にも、父性と母性という二つの愛があったとした。野村は子どもの生活を静観するのが父性で、この父性の発動は、子どもの成長にとって深い意味を持つとした。母性については、子どもを抱きかかえ、子どもの着物を縫い、小便をやってやるような態度等に出る「愛」であるとした。沢山（2013）は野村の考えについて、この当時の男と女や父親と母親の一般的な姿からは異端だとした。そして野村は、男＝父性、女＝母性という当時の考えに対して、男と女ともに父性と母性が備わっているとし、「男女協力」の子育てを主張した、としている。また、明治期の歌集「みだれ髪」等で著名な与謝野晶子（以下与謝野）についても言及しており、与謝野にとって男も育児を平等に担うのは当然のことであったとした。沢山（2013）によると、野村と与謝野は、自らの自己実現の立場から、性別役割分業を批判した。そのうえで、子育ては「男女協力」が必要と主張した、とする。その理由として、①男女相互の人間性回復の意味を持つ、②男女が協力したうえにたつ文化は人生的意味が深く、男女相互本位のむつまじい社会が実現するに違いない、の二点を挙げ、母親役割への痛烈な批判を示している。

これらの先行研究から、明治・大正期は、わが国の子育ては母親の役割とされ、父親が子育てから排除されていったという状況がみられた。

3. 研究の方法

本節では、調査対象とした文献の選定方法、分析対象とした項目、分析の方法及び手順、倫理的配慮を示す。

(1) 調査データの選定方法

NII学術情報ナビゲータ（CiNii）において、「大正 育児」「大正 子育て」「明治 育児」「明治 子育て」のキーワードにて文献を検索した。検索された文献のうち、本研究目的に合致する文献を抽出した。文献の検索期間は、2021年8月までとした。

(2) 分析の方法及び手順

NII学術情報ナビゲータ（CiNii）にて検索したところ、2021年8月の時点で「大正 育児」は41件、「大正 子育て」が40件、「明治 育児」が111件、「明治 子育て」が146件、「近代 育児」90件であり、計428件であった。428件の中から、本研究の目的に合致した文献は、13文献であった。これらの13文献から「明治・大正期における母親・父親の子育て役割」と「父親の子育て状況」の記述について、分析した。

(3) 倫理的配慮

本研究を進めるにあたっては、論文の著作権を侵害することがないように留意した。また、日本社会福祉学会の倫理綱領に基づいて分析を進めた。

4. 結果

本研究目的に合致した13件の文献を分析した結果、①明治・大正期における母親・父親の子育て役割、②父親の子育て状況の2つに分類された(表4-1)。①明治・大正期における母親・父親の子育て役割に関する文献は9件、②父親の子育て状況の文献は4件であった。

表4-1 研究対象文献一覧

No.	著者	表題	雑誌名	巻数	頁数	刊行年
1	阿部和子, 柴崎正行, 阿部栄子, 豊澤博昭, 坪井瞳, 加藤崇織	近現代日本における育児行為と育児用品に見られる子育ての変化に関する一考察	人間生活文化研究	第24巻	pp. 245-264	2014年
2	出沢さま, 寺田真廣, 今関節子, 田村文子, 二渡玉江	大正末期より昭和20年代における育児法をたずねて—伝承によるその自然なすがた—	群馬大学医療技術短期大学部紀要	第3巻	pp. 61-77	1983年
3	石橋順子	乳母の衰退—明治期以降の乳母制度—	言葉と文化	第11巻	pp. 51-67	2010年
4	木下比呂美	明治期における育児天職論と女子教育	教育学研究	第49巻3号	pp. 255-264	1982年
5	桑畑洋一郎	近代日本における“母乳育児”概念の分析	異文化研究	第14巻	pp. 36-49	2020年
6	栗原浪絵	明治期における与謝野晶子の創作活動：出産・育児をめぐる晶子の思い	東京大学大学院教育学研究科紀要	第47巻	pp. 327-336	2009年
7	前田晶子	明治初期の子育て書における発達概念の使用：近代日本における発達概念理解についての一考察	鹿児島大学教育学部研究紀要	第56巻	pp. 219-227	2005年
8	松山邦夫	日本人における幕末から明治期にかけての子供と子育てに対する見方	佐賀大学教育学部研究論文集	第4巻1号	pp. 173-180	2020年
9	孫峰若	『婦女新聞』に見る明治日本の家政学	言葉と文化	第9巻	pp. 127-145	2008年
10	柴崎正行, 安齋智子	『児童研究』誌からみた近代における育児観の形成	東京家政大学研究紀要 人文社会科学	第43巻	pp. 63-70	2003年
11	下西さや子	明治期における児童虐待問題の構築と子どもの権利思想	社会福祉学	第46巻第1号	pp. 3-15	2005年
12	杉山実加	明治20年頃の女性雑誌において「逸脱した母」とされた乳幼児の母親像	名古屋短期大学研究紀要	第59号	pp. 165-177	2021年
13	寺田真廣, 今関節子, 出沢さま, 二渡玉江, 田村文子	大正期より昭和20年代における育児法をたずねて—第Ⅱ報—	群馬大学医療技術短期大学部紀要	第4巻	pp. 27-35	1984年

筆者作成

(1) 明治・大正期における母親・父親の子育て役割

まず、明治・大正期の子育ての変遷に分類された文献について内容を整理する。木下(1982)は、国家主義的育児天職論の形成時における論理構造と機能について整理している。育児天職論は、育児は婦人の義務ということが前提とされ、婦人は子育てを専念することが当然であるとされる。これは性別役割分業につながる主張である。木下(1982)は、育児天職論は明治20年代初頭(1887年頃)に表れ、明治30年代(1897年～)には世論として定着し、主に三つのタイプがあるとした。その中で、共通することの一つとして、妊娠・出産・育児を婦人の先天的な義務としていることをあげている。そして、明治32年(1899年)に高等女学校令が公布され、良妻賢母の養成が目的となり、明治36年(1903年)には「家庭教育ト国家」が教授科目に加わり、家庭教育の母親の責務の強調と国家的責務であることを説いたとされた。また、木下(1982)は、明治31年(1898年)に公立高等女学校は19校であったが、明治43年(1910年)には193校に増加したことにより、性別役割分業が固定化したと述べている。

女学校が性別役割分業の固定化に大きな影響を与えたとされており、明治初期に、子育て書「母親の心得」が翻訳され、「発達」という語が用いられていることから注目され、女学校の教科書として使用された。この「母親の心得」の原著は、母親による子どもの身体面・精神面・道徳面における教

育といった内容で構成されていたが、翻訳されたのは身体面と精神面のみであった（前田、2005）。

性別役割分業化には、教育領域だけでなく、雑誌やジャーナルといったものの影響も見受けられる。下西（2005）によると、わが国では、明治20年代（1887年～）に「家庭」という言葉が用いられるようになり、明治30年代以降（1897年～）には「児童研究」や「婦人と子ども」が創刊され、「家庭教育」という概念が創出された。1898年以降、わが国では、人口動態統計が整備され始めるが、政府は乳児死亡率の高さを育児環境全般の問題とし、母親の職業・教育程度、哺乳の状況等と結びつけ、母親を対象とした調査を実施した、としている。下西（2005）はこの調査自体が、母役割が規範化する契機になったと考えられるとしている。また、明治30年代（1897年～）に欧米の心理学等が広がり、三歳児神話について論じられるようになったことに注目している。明治中期の女性雑誌から、国民を生み育てる場が「家庭」で、「国家」のために子どもを産み、育てることこそが、重要な母親の役割とされたとした。そして、男性は稼ぎ手、女性は家事・育児という性別役割分業が固定化されたとし、子育ては母親の責任において行うものに変貌したと考察している。

柴崎ら（2003）は、研究誌「児童研究」に掲載された論説と記事から、明治後期から昭和初期の育児観について検討している。そして、子守りや乳母に子育てを任せることの危険性があることを説き、衛生について知識のある母親が子育てをすることが良いとされているとした。子どもの健康管理についても、母親は子どもの健康管理において重要な役割を担っているとしたうえで、子育て役割の担い手について、母親への比重が大きく変化していく過程があるとした。明治40年代（1907年～1912年）までは、両親を中心に様々な人によって子育てされていることが前提とする論説が多かったが、大正期以降は父親への言及はなくなり、母親を主な子育ての担い手とする論説が多くなったとされた。この「児童研究」の分析から、大正から昭和にかけて母性は産む性だけでなく、子どもに対して愛着を有するものとしての母性が強調されたことを示した。

明治期に来日した、動物学者のEdward Sylverster Morse（以下モース）の手記や著書から、当時の子育て状況を把握することができる。明治10年（1887年）に来日したモースの著作『Japan Day by Day』（日本語訳『日本その日その日』）における子どもと子育ての様子の記述を分析した研究では、子どもや子育てに関する記述が29か所あった。内容は8つに分けられ、①「他者を気遣う態度を持っていること」（9箇所）、②「母親は赤ちゃんに対して穏やかに接していること」（4カ所）、③「勤勉で知識があること」（4カ所）、④「好奇心が強く楽しく工夫して遊んでいること」（4カ所）、⑤「物優しく育てられていること」（3カ所）、⑥「赤ちゃんの世話をする習慣とそれにより身体が強いこと」（2カ所）、⑦「社会的規範に守られること」（2カ所）、⑧「芸術や自然の美に対して敏感なこと」（1ヶ所）であった。この結果から、当時は子どもに対して、他者を気遣うことができるよう育て、社会的規範を身につける等、教養を身に付ける子育てがなされており、社会全体で子どもを大切にする風潮があったと考察している（松山、2020）。

阿部ら（2014）は「おんぶ」と「抱っこ」に着目し、近代化により変容する日本人の子育てのあり方を検討した。阿部らは、明治10年（1887年）に来日したモースが「婦人が必ず赤ん坊を背負っている」と記録していることを「おんぶ」している姿と捉えている。当時、子どもが子守をし、そのさいに「おんぶ」をしていたが、母親も子どもを背負う事で両手が空き、家事をすることができるため、「おんぶ」はなくなってきたとしている。

また、当時の逸脱した母親の研究も行われており、明治20年前後には、女性のための雑誌が刊行され、その中で「女学雑誌」「女学新誌」「女学図叢誌」の雑誌では、①年齢の若い母親、②母乳が十分に出ない、あるいは不健康である母親、③健康に問題のある子どもの母親、④子どもの我儘を許している母親、⑤商人・職人の母親、⑥祖父母の手助けを受けて子育てをしている母親、⑦新しい女性の在り方を体現している母親は否定的に扱われたとしている（杉山、2021）。

逸脱した母親の条件の中に母乳に関する項目があるが、桑畑（2020）の明治・大正期の母乳育児の研究では、母乳は健康な子どもを育てるうえで最上のものであり、母乳育児は子どもに情緒的成長を提供するとされたとした。そのうえで、国家のためといった観点から、育児法等が推奨され、母乳育児もその中に含まれるとしている。そして、明治・大正期の母乳育児は母と家族の自己管理の徹底を要求し、当時の国家衛生の論理や優生思想と同じで、親が行う育児レベルを超えて、国家繁栄と結びつけられたとまとめている。

（2）父親の子育て状況

孫（2008）は、明治33年に創刊され、昭和17年まで続いた「婦女新聞」を家政学の視点から分析している。孫（2008）によれば、わが国では明治時代に欧米文化の吸収の中、家政学が誕生し、良妻賢母主義を取り入れる為、学校教育で料理や編み物等を教授させ、家事に関する書物の翻訳も盛んに行われた。そして、明治期中頃に、女学校の教科書に家政学の名称が出現し、大正期になると、経験や技能による家事から食事等の実証的研究へと発展したとしている。

明治20年代には、子育てを家庭の中心的役割に位置づける考えが出現し、日露戦争後には、母親の重要な役割として、子どもを含む家族の健康管理があげられた。その中で、父親の子育てへの参加を促す文章が載せられていることも明らかにしている。第39号（明治34年）は、父親も子どもの世話や相手をし、子どもの直接的な教師になることが書かれており、子育てにおける男性の役割が強調された、としている。第40号（明治34年）においても、男子もできるだけ家族と一緒に遊び、散歩し、子どもの躰を助け、家庭の平和を保つ義務があるとされ、孫（2008）は家族と一緒に楽しむことが理想とされたと、述べている。

栗原（2007）によると、与謝野は女性にとって出産は命綱であり、男性は何の関係もないとも述べている、とした。栗原（2007）は、明治期は女性の出産や育児に関する発言が限られていた中で、与謝野のこうした発信は出産・育児に対する現実的で聡明なまなざしに支えられていた、と論じている。

石橋（2010）の明治期以降の乳母制度の研究によると、1887年頃から、雑誌「女学雑誌」は乳母ではなく、生母による育児の重要性を説きはじめ、1900年の「婦女新聞」においても母親の責任の重大さについて説いているとされた。その中で、与謝野は1916年の論文にて、子どもの子育てを乳母・女中・里親等に任せることは罪悪であり、子どもが不幸になるとし、両親揃って行う子育てが完全なものだとされ、父親の協力がないと子どもへの損害は多大であるとした。この点について石橋（2010）は、与謝野の議論は父親の子育てへの関与の重要性を説いた特徴的な議論であった、と述べている。

出沢ら（1983）は、明治期に出生し、大正から昭和20年前半までに出生した母親16名にインタビュー調査を行った。育児方針に関する調査では、育児の決定権が父親にあったとした方は2名で、夫は稼ぐのみで、世話もやかなかったとした方は11名であった。一方、沐浴を行った父親が6名おり、沐浴

に関してはかなり協力が得られていたようである。このことについて、出沢らは理由について詳しくはわからないとしつつ、沐浴を父親が行う利点は大きいとしている。理由としては、当時は父親が最初に風呂に入ることが通例であったため、感染症予防の視点から考えると、新生児がきれいな湯に入ることは、利点が大きいとした。

寺田ら(1983)の大正・昭和初期に子育てを行った女性76名に行った調査から、出産時に夫(父親)の関わりがあったことが明らかにされている。最も多い関わりは、「湯わかし」(14名)、「産婆を呼びに行く」(10名)、「家、洗濯手伝い」(5名)と続いており、「非協力的」という回答は1名であった。

5. 考察

(1) 明治・大正期における子育ての性的役割意識

先行研究において、沢山(1990)は、1882年(明治15年)に「家庭教育」という概念が普及し、担い手は母親とされたことで、父親が子育ての表舞台から消えていったとし、1899(明治32年)には、高等女学校令から、「良妻賢母論」を支柱に女子教育が行われた(牟田、1996、木村、2019)とされていた。本研究結果から、「育児天職論」が明治20年代初頭(1887年～)に表れ、明治30年代(1897年～)には世論に定着されたとしている。そして、明治32年(1899年)の高等女学校令、明治36年(1903年)には「家庭教育ト国家」が教授科目と加わり、さらに公立女学校の増加(木下、1982)とこの社会的な変遷を考えると「子育ては女性の役割」とする社会的な環境が整い、当然の役割と認識が流布していったことを否定することはできない。そして、この状況は沢山(2013)が述べている通り、子育てという舞台から父親が消えて行く社会であったことも否定できないであろう。

この時期、日本に來日したモースの手記から、明治期の子育ての様子を知ることができる。モースの著書を分析したところ、「母親は赤ちゃんに対して穏やかに接していること」に関する内容が2番目に多く記載されている(松山、2020)。また、モースは「婦人が必ず赤ん坊を背負っている」と記録している(阿部ら、2014)。このことから、実際の家庭において、母親が子育て役割を担っていたことがわかる。

明治初期の子育て書の「発達」概念の使用に着目した文献からは、「母親の心得」が翻訳され、母親による子どもの身体面と精神面における教育が翻訳され、女学校の教科書としても使用されていたことが明らかになった(前田、2005)。さらに明治・大正期は国家衛生の倫理や優生思想が根底にある中で、母乳育児が推奨されていた(桑畑、2020)。当時の女性雑誌において、母乳が十分に出ない母親は否定的に扱われていた(杉山、2021)とされており、医学的な分野を雑誌などの媒介を通じて社会に流布していたことがわかった。先行研究同様、当時は子育て書の翻訳も多く、母親の子育てを促進する内容が父親の子育てを排除することにつながっていった可能性があるといえよう。

次に雑誌・研究誌、著書に関する研究に目を向けたい。下西(2005)は、明治30年代(1897年～)以降、「児童研究」「婦人と子ども」が創刊され、女性誌から国民を産み育てる場は「家庭」であり、「国家」のために子どもを産み、育てることが母親の重要な役割とされた、としている。柴崎ら(2003)の「児童研究」の論説・記事に関する調査でも、母親は子どもの健康管理において重要な役割を担っていることが説かれ、明治40年代(1907年)までは両親が子育てを行うことなどが前提とされた論説

が多かったが、大正期以降は父親への言及はなくなったことを明らかにしている。杉山（2021）は、明治20年前後の雑誌を分析し、当時の母親像から逸脱する母親の要因について整理した。

この雑誌に関する研究から、学校教育や家庭教育といった制度的な部分から母親の子育てが強調されただけなく、雑誌や研究誌といった、人々が気軽に手に取り、情報を得る道具においても母親の子育て役割の重要性を説くことの影響力は多大であり、母親の子育て役割の促進に大きく貢献したと考えられる。そして、制度的な部分で子育てから排除されてきている父親に対し、雑誌・研究誌が子育てから父親を排除することに拍車をかけたと考えられることもできる。

また、大正期以降は父親への言及がなくなったという結果であったが、先行研究で1900年代初め（大正期）に「母性愛」という語が広く流布され、母親たちの支持を受けたとされている（沢山、2013）。明治期から大正期に代わる1900年～1910年代は父親の子育てにとって、分岐点であったともいえる。制度的な面や雑誌等において、子育て役割は母親が担い手であるとする概念や考えが広く社会に流布され、認知されており、「児童研究」では、明治40年代（1907～1912年）ごろまでは、両親が子育てを行うことが前提とされた論説が多かった（柴崎ら 2003）。先行研究と本研究から、明治期から大正期に変わりゆく中で、「母性」「母性愛」が広く社会に流布されたことで、子育て役割の担い手は母親ということが認知され、社会から子育ての担い手としての父親は排除された流れがあり、明治期から大正期の変わり目は、父親の子育てにとっても大きな分岐点だったといえよう。

（2）父親の子育てへの肯定の背景にある動き

ここまで、父親が子育て役割から排除されていく変遷について考察してきた。ここからは、父親が子育てから排除されていく状況での、父親の実際の子育てについて考察を加える。

先行研究や柴崎（2003）の研究から、明治40年代（1907～1912年）までは、雑誌や研究誌は父親の子育てに関する論説が多かったとしている。孫（2008）の「婦女新聞」の分析から、明治20年代（1887年～）に、子育てが家庭の中心的役割とされ、日露戦争後は子どもと家族の健康管理は母親の役割とされた一方で、父親の子育てへの参加を促す文章が掲載されたことを明らかにしている。

明治34年（1901年）の論説では、父親も子どもの世話や相手をして、できるだけ家族と一緒に遊び、子どもの躰を助け、家庭の平和を保つ義務があるとされた。柴崎ら（2003）は「児童研究」において明治40年代（1907年～）までは父親が子育てを行うことを前提とする論説が多かったとしているが、「婦女新聞」においても明治30年代（1897年～）には父親の子育てに関する論説が記載されていた。

孫（2008）の研究結果から、当時の社会では、子育ての役割は母親が担うとの考えが広く認知されたが、明治30年代（1897年～）までは父親が子育てから完全に排除されていたわけではないことがわかる。しかし、「できるだけ」と記載されていることから、主な子育て役割の担い手は母親であるということが垣間見れる。このことから、明治30年代（1897～）ごろまでは、「婦女新聞」においても父親の子育てに関する論説を確認することができるものの、あくまでも子育て役割の担い手は母親で、父親は子育てにおいては補助的役割を担う存在として捉えられていたといえる。沢山（1990）が父親は育児方針の提供者から協力者へ変わった、としていることから、明治30年代時点で父親は子育てに関しては補助的役割を担い、協力者という立場に変化したと考えられた。その中、栗原（2007）は、女性の出産や育児に関する発言は限られていた中で、与謝野の創作活動は出産や育児に対する現実的

で聡明なまなざしに支えられていたとした。また、与謝野について、両親が揃って行う子育てが完全なものだとし、父親の協力がないと子どもへの損害は多大であると述べている(石橋、2020)。そして、性別役割分業を批判し、子育ては「男女協力」が必要であるとされたことが与謝野と野村に共通していた(沢山、2013)。

子育ての担い手は母親とされ、父親は補助的役割・協力者とされていた社会で、成立しつつある性別役割分業を批判し、父親が子育ての主体者となり、「男女協力」して子育てを行うべきであるという主張は当時としては画期的であるといえる。この時代に与謝野や野村が行った役割は現実的に、子育てを行っている父親や母親の中には少なからず影響を与えていたのではないだろうか。

出沢ら(1983)が行った調査では、父親が沐浴を行っていたとする回答が多数であったことが明らかにされているほか、寺田ら(1984)の大正・昭和初期に子育てをした女性への調査においても、出産時に湯沸かしや家事・洗濯を手伝ったという回答が多数見受けられ、非協力的であったとする回答は1名であった。これらの調査は、大正期の後半のため、明治期とは状況が異なると認識すべきではあるが、大正期後半では、父親が子育てに協力していた事実もが明らかになった。明治期から大正期に移り変わる中、父親は子育ての舞台から排除されたと捉えることができる一方で、与謝野や野村の「男女協力して子育てを行うことが望ましい」との主張は父親の子育てに影響を与えていたとも考えられるのではないだろうか。

本研究から、明治・大正期は、教育制度や社会的風潮から子育ての担い手は母親とされ、父親の子育て役割は変貌していったが、実際の子育て家庭では、父親が子育ての役割を担っていたわけで、その背景には、明治期から大正期にかけて都市化の影響などから、母親だけで子育て役割を担うことが難しい家庭があったこと、そしてこの当時、野村や与謝野といった社会的に著名な人物が、父親が子育てを担うことの必要性を社会に主張していたこと、などが、父親が子育ての役割の一部を担うことに寄与したとも考えられる。これは、現在の社会と類似していることも多く、わが国では性別役割分業の意識は根強く残っていることは現実的であるが、現代においても、与謝野や野村のような一定の著名人等による発信が父親の子育ての促進に影響を与えうる、とも考えられるだろう。

6. まとめ

本研究より、明治期以降、教育制度や社会的風潮から、子育ては女性の役割へと変遷をとげ、父親は子育ての役割から排除された一方で、社会的な著名人による父親の子育て役割の必要性を訴える発信があり、大正期には父親が子育てに協力していた実情が明らかになった。明治期における、教育や子育てに関する法令や書籍が子育てを母親の役割として強調するような状況、そして大正期における、父親の子育てを奨励するような発信をする社会の動きは、父親の子育て当事者、そして子育て支援の対象者として位置付けられるかどうかにも関わるだろう。今日の子育て支援でも、社会風潮や発信が母親・父親両方を対象と位置付けた発信となることで、母親のみならず、父親の子育てをより受け入れやすいものにするとともに、父親が子育て支援を受けやすい社会にもつながるといえるだろう。

本研究では、大正期における著名人の社会的発信を生み出すことに寄与した要因への考察を欠いている点等は限界である。今後、引き続き社会制度や風潮がどのように子育てや父親の子育てに影響を

与えるのか、多面的に考察することを課題としたい。

参考文献

- ・阿部和子 柴崎正行 阿部栄子 是澤博昭 坪井瞳 加藤柴織、近現代日本における育児行為と育児用品に見られる子育ての変化に関する一考察、人間生活文化研究第24巻、pp.245-264、(2014)
- ・ベネッセ教育総合研究所、乳幼児の生活と育ちに関する調査 2017 - 2020」、<https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail.php?id=5290> (2021年8月)、(2021)
- ・出沢さま 寺田真廣 今関節子 田村文子 二渡玉江、大正末期より昭和20年代における育児法をたずねて—伝承によるその自然なすがた—、群馬大学医療技術短期大学部紀要第3巻、pp.61-77、(1983)
- ・石橋順子、乳母の衰退—明治期以降の乳母制度—、言葉と文化第11巻、pp.51-67、(2010)
- ・石井クンツ昌子、『育メン』現象の社会学 希望・子育て参加への希望を叶えるために、ミネルヴァ書房、(2013)
- ・木下比呂美、明治期における育児天職論と女子教育、教育学研究第49巻3号、pp.255-264、(1982)
- ・木村涼子、「主婦という労働、辻浩和 長島淳子 石塚静恵編、女性労働の日本史 古代から現代まで、勉誠出版、pp.210-223、(2019)
- ・小山静子、高等女学校教育と良妻賢母観、京都大学教育学部紀要、pp.94-104、(1981)
- ・蔵澄裕子、近代女子道徳教育の歴史：良妻賢母と女性特性論という二つの位相、研究室紀要第34巻、pp.49-57、(2008)
- ・桑畑洋一郎、近代日本における“母乳育児”概念の分析、異文化研究第14巻、pp.36-49、(2020)
- ・栗原浪絵、明治期における与謝野晶子の創作活動：出産・育児をめぐる晶子の思い、東京大学大学院教育学研究科紀要第47巻、pp.327-336、(2009)
- ・前田晶子、明治初期の子育て書における発達概念の使用：近代日本における発達概念理解についての一考察、鹿児島大学教育学部研究紀要56巻、pp.219-227、(2005)
- ・松山邦夫、「日本人における幕末から明治期にかけての子供と子育てに対する見方」、佐賀大学教育学部研究論文集 第4巻1号、pp.173-180、(2020)
- ・村上淳子、「主婦」と日本の近代、同成社、(2019)
- ・牟田和恵、戦略としての家族、新曜社、(1996)
- ・中川まり、女性自身の性別役割分業—見えぬ壁を乗り越える、坂本有芳 岡村利恵 岩下好美 蟹江教子 花形美緒 劉楠 藤田智子 佐野潤子 大風薫 中川まり 高丸理香(石井クンツ昌子監修)、キャリア・デザインと子育て—首都圏女性の調査から、お茶の水学術事業会、pp.133-141、(2016)
- ・野村芳兵衛、野村芳兵衛作品集(2) 新教育に於ける学級経営、黎明書房、(1973)
- ・沢山美果子、近代家族と子育て、吉川弘文館、(2013)
- ・沢山美果子、子育てにおける男と女、女性史総合研究会編、日本女性生活史 第4巻 近代、東京大学出版会、pp.125-162、(1990)
- ・柴崎正行 安齋智子、「児童研究」誌からみた近代における育児観の形成、東京家政大学研究紀要1、人文社会科学第43巻、pp.63-70、(2003)
- ・下西さや子、明治期における児童虐待問題の構築と子どもの権利思想、社会福祉学第46巻第1号、pp.3-15、(2005)
- ・孫峰茗、「婦女新聞」に見る明治日本の家政学、言葉と文化第9巻、pp.127-145、(2008)
- ・杉山実加、明治20年頃の女性雑誌において「逸脱した母」とされた乳幼児の母親像、名古屋短期大学研究紀要第59号、pp.165-177、(2021)
- ・寺田真廣 今関節子 出沢たま 二渡玉江 田村文子、大正期より昭和20年代における育児法をたずねて—第Ⅱ報—、群馬大学医療技術短期大学部紀要第4巻、pp.27-35、(1984)

A Study on the Historical Transition of Father's Child-rearing in Japan
—Focusing on the Meiji and Taisho eras—

OKAMURA Yasuhiro, MINAMINO Natsuko

Abstract

Although father's child-rearing has been promoted and studied, most of them have focused only on women and mothers as caregivers. In this study, the historical transition of father's child-rearing in Japan is considered through reviewing literature in Meiji and Taisho eras.

Since the Meiji era, child-rearing has transitioned to women's role, and fathers have been excluded from them. Since 1912, magazines have shown that articles on fathers' child-rearing have disappeared. On the other hand, socially prominent people addressed the necessity of the father's child-rearing roles, and fathers also cooperated in child-rearing in the Taisho era. Socially prominent people's raising voices on the necessity of the fathers taking roles in child-rearing contributed to the fathers getting involved with child-rearing. Even if the voices are small, the idea of "the significance of raising children in cooperation with men and women" is transmitted to society.

Keywords : father, child rearing, historical transition